

CRDS – 政策研究大学院大学 GiSTプログラム 共催セミナー

研究の指標、価値、インパクトの最大化

-責任ある研究評価の次のステップとは?-

講演者;

James Wilsdon 教授

Executive Director, Research on Research Institute (RoRI)

Professor of Research Policy, Department of Science, Technology, Engineering and Public Policy (STEaPP), University College London



日時: 10月11日(金) 15:00-16:30、開場 14:30

会場: [政策研究大学院大学 5階 M 講義室](#)、オンライン

使用言語: 英語、通訳はありません。

参加登録: <https://forms.gle/wd2ggq6HC5wd8Nz89>

お問い合わせ: noel.kikuchi@jst.go.jp

※本セミナーは研究イノベーション学会評価分科会と合同で行います。

概要;

現在、研究評価手法は日進月歩で洗練されてきています。国レベルで業績ベースの研究評価を何らかの形で行っている国々では、研究論文の生産性から研究の質へと評価の重点を移しています。また、研究の経済的社会的影響も重視した評価システムを構築しており、評価の範囲は広がりを見せています。

さらに、研究文化へポジティブな変化を促進するための加速剤として評価を使用する動きが進んでいます。これを「総括的」評価から「形式的」評価へのシフトと表現することもあります。この動きに伴い、評価プロセスの官僚主義と事務負担を軽減しようという試みも見られます。

この分野で最も重要な近年のイニシアティブは、2022年に発足した CoARA (Coalition for Advancing Research Assessment) であり、現在では 800 以上の組織が署名しています。2023年には、DORA (研究評価に関するサンフランシスコ宣言) が 10 周年を迎えました。国家レベルでは、オーストラリア、ノルウェー、チェコ、イタリア、ニュージーランド、スウェーデン、英国などで評価フレームワークの改革の動きが見られます。中国では、「四唯」(論文のみ、肩書きのみ、教育背景のみ、賞のみでの評価)の影響を打破する新たな推進力が生まれています。そして、ここ日本でも同様の議論がはじまっています。

このように研究評価は変化しつつありますが、変化の速さはまだ十分とは言えません。この講演では単なる指標と測定に関する議論を超えて、研究の卓越性の変化、活力に満ちた健全な研究文化を育成する方法、多様性と包摂の原則を評価へ組み込む方法を紹介します。同時に責任ある研究評価を進めていくために効果的な取り組みとは何か、意図しない結果をもたらす可能性があるのかといった点について参加者と議論します。



講演者略歴：

科学と研究のガバナンスやエビデンスと意思決定の関係を研究テーマとしている取り組む学際的なメタサイエンティスト。2023年よりユニバーシティ・カレッジ・ロンドン (UCL) 教授。2019年に共同設立した Research on Research Institute (RoRI) のエグゼクティブディレクターを務める。RoRIのコンソーシアムには現在、年間25億ドル以上を研究開発に投資する15か国の研究資金提供者が参加している。

1990年代後半から国際的な科学技術政策の中心で活動しており、シェフィールド大学、サセックス大学、ランカスター大学の研究職を歴任。シンクタンク、NGOや英国王立協会の科学政策と国際関係のディレクターを務めた。

研究の上流からの市民参画、科学技術外交、責任ある研究評価などの概念を推進してきた。国際的な科学的助言のネットワークであるINGSAの共同設立者であり、2021年まで副会長を務める。2014-15年には研究指標に関するレビューを主導し、『The Metric Tide』として公表。近年続編である『Harnessing the Metric Tide』が発表された。2015年に英国社会科学アカデミーのフェローに選出。2022年には国際科学会議(ISC)のフェローにも選出された。